

航空科学技術委員会（第 61 回）及び研究開発ビジョン作業部会（第 1 回）
における各委員からのご意見の整理

①「1.（1）研究人材の改革」関連

（求められる研究者像）

- ・「航空宇宙分野に求められる研究者像」とは何か。公的研究機関であれば、短期（10年程度）ではなく中長期的（30年程度）に重点研究開発分野の変化に対応できる研究者（常に重点分野のスペシャリスト）なのではないか。
- ・スペシャリストばかりが育っても日本の技術としてまとまっていけないので、ジェネラリストを養成する仕組みが必要であり、国がこれを支援する形が取れると良いように考えている。
- ・国際学会において、日本の得意な分野以外は殆ど日本人がいないのが現状。

（若年層の育成）

- ・大学や大学院に入ってから、航空の道に進みたいと思っても、結果として、気づくのが遅くて進路として選択しないことになることも。技術系・事務系問わず、若年層のうちから理解を図っていくことが重要ではないか。
- ・航空を学んだ学生（特に博士学生）が、航空関係の職を志すような仕組みが必要。
- ・「研究者」という職業の魅力の減退（不安定な身分、低い給与）が、別分野や研究以外の職種への人材流出の一因となっているのではないか。
- ・大学や大学院では、（研究者のみならず、）あらゆるフィールドで活躍できる素材（理系の素養を持った人材）の提供を行うことが重要。

②「1.（2）研究資金の改革」関連

- ・航空宇宙分野の研究開発予算が大幅に増えることは現実的には望めないので、「予算の獲得」だけでなく、「研究リソース（予算・人員）の効率化」が肝要ではないか。
- ・より少ない予算、より短期間で産業に貢献する成果を出す制度を導入すべき。先端総合工学である航空宇宙工学の存在価値として、他分野へのスピリアウトの正当な評価も必要。

③「1.（3）研究環境の改革」関連

- ・そもそも今の研究環境も「種々雑多な”改善”の末に出来上がったもの」で「意図的に作ったもの」ではない中、「研究環境」を「意図して改善できる」か？

- ・ 研究開発設備の維持管理は研究開発法人の重要な役割の一つ。JAXA の研究設備は他大学にとっては「環境」であるが JAXA にとっては「役割」では無いか。

④「1. (4) 大学改革」関連

- ・ 教員の評価が「研究業績」に基づき行われることから、「過去の研究」を継続し、論文にしやすい「容易な研究」をやるほど評価されやすい傾向。そのような状況で新たな分野へ挑戦するのはリスクでしかなく、これがイノベーション創出の妨げともなっている。「業績」の評価基準・方法の改革等が必要では無いか。

⑤「2. 未来社会デザインとシナリオへの取組」関連

(総論)

- ・ 今後需要拡大が想定されている航空輸送がキーとなると考えられる。空の移動革命、society5.0などの情勢を考慮しつつ、社会がこう変わるのであれば、航空輸送はこう変わるという見方が必要になってくると思われる。
- ・ 旅客機の市場の成長（超音速機を含め現在の市場の延長）と空の移動革命（新規のマーケット）は違うものと捉えるべき。

(旅客輸送)

- ・ 旅客輸送については、経済的効率性のため、大型化したうえでロードファクター向上を目指す傾向にあるのではないか。
- ・ 超音速機のメリットは、運航側から見ると、1日で往復できなかったエリアを往復できることで、所有する機体数を減らせること。
- ・ 製造において society5.0 のような観点が必要とされる背景は何か。航空機需要拡大の結果製造として必要となっているものなのか、それとも世の中のデジタル革命が進んでいることが影響した結果なのか

(空の移動革命)

- ・ 航空機が自動車のように簡単に使える社会や通信のレベル向上による安全な交通整理が可能となる社会などが考えられる。

(産学からの観点)

- ・ 産業の観点からは、燃費、安全性、環境性を満たすものが、将来の移動手段となるということは間違いないと思われる。それに加えて、移動時間としてのどの程度が求められるかは議論の余地があると思う。
- ・ ニーズ側（エアライン側）の知見も踏まえたシーズを抜きの議論の必要もあるのではないか。

⑥「3. デザインを実現する先端・基盤研究、技術開発」関連

- ・ 人的予算的リソースは限られているので取捨選択が重要ではないか。その中で、応用研究では最終的にTRL9までつながるような研究開発課題への注力(その提案の段階から民間企業等との密接な協働を必須とする、等)が望まれる。
- ・ 今後我が国は、基盤技術としての得意分野を伸ばしていくのか、それとも、システムのなところまで踏み込んで軸足を置いていくのか、という方向性を共通認識が持てるといい。
- ・ 未来社会デザインを実現するための技術としての技術の進歩 (例えば電動化技術)を合わせて慎重に考えるべきと思う。
- ・ 尖った技術を求めれば、おのずと軍事利用への橋渡し (デュアルユースの観点) という議論になることについてどう整理するのだろうか。
- ・ 応用研究の出口戦略のためには、実機による研究開発環境の一層の整備が必要ではないか。
- ・ AI・IoT活用はあらゆる分野で当たり前という認識。
- ・ 他分野への技術移転も先端総合工学としての航空宇宙工学の役割の一つであることから、積極的に取り組むべき。